学校番号	2

様式1

令和7年1月18日

学校名　板橋区立志村第一小学校

校長氏名　髙橋　宏彰

令和6年度　板橋区立学校経営計画表・自己評価表・学校関係者評価表

学校教育目標	○健康で心豊かな子ども　○よく考え工夫する子ども　○ねばり強くやりぬく子ども　◎進んで協力する子ども
目指す学校像	通ってよかった・通わせてよかった・務めてよかったと思える、愛される学校
目指す児童像	「かがやけ！　志一の子」（かんがえる子　がんばる子　やさしい子　けんこうな子）
目指す教師像	「気付き」「考え」「実践する」教職員

領域	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策	評価指標・評価基準 取組（努力）指標	評価指標・評価基準 成果指標	取組（努力）指標評価 中間	取組（努力）指標評価 年間	成果指標評価 中間	成果指標評価 年間	分析コメント	改善策
学力の向上・定着	①児童の、基礎的・基本的な学習内容の確実な定着 ②児童の、課題を主体的・協働的・探究的に解決する力の育成	①児童の、読む、書く、考える、計算する力の定着 ②各教科等の指導における、主体的に学び、協働的に自らの考えを深める力の育成	①基礎学力定着のための学力推進週間及び全学年補習教室の実施 ①九九や計算力の定着に向けた「九九マスター」の取組 ①書く力を育成する「はがき新聞」の取組	4 各学級実施 年間15回以上 3 各学級実施 年間10～14回 2 各学級実施 年間5～9回以上 1 2の指標に満たない	4 基礎的な学力調査TOFAS 第5学年国語・算数共 得点率8割 3 基礎的な学力調査TOFAS 第5学年国語または算数 得点率8割 2 基礎的な学力調査TOFAS 第5学年国語または算数 得点率7割 1 2の指標に満たない	3	4	4	4	具体的方策を実践し、成果指標の4を達成することができた。TOFASの第6学年の結果も国語・算数とも8割を超えており、基礎的な学力は定着していると考える。	放課後学習教室等で学力向上支援員や学生ボランティアの力も活用しながら、指導の個別化を進め、学力の定着を図ってきている。ただ、理解に時間を要する算数の単元などは、授業での理解度や単元テストの結果は芳しくなく、教員の指導力向上が必要である。また、各種取組が単発的で、一体的な計画としては不十分である。学力向上担当教員を中心に、全体計画等の見直し・改善を図る。
			①清水図書館や図書ボランティア、近隣幼稚園との連携による読書活動の推進 ①毎週1回の朝読書タイムの設定	4 計画した全ての取組を実施 3 計画した全ての取組 9割以上実施 2 計画した全ての取組を 8割以上実施 1 2の指標に満たない	4 11月児童アンケート「本をたくさん読んでいますか」肯定的評価前年度比5Pアップ 3 11月児童アンケート「本をたくさん読んでいますか」肯定的評価前年度比0-5P以内 2 11月児童アンケート「本をたくさん読んでいますか」肯定的評価前年度比-5P以内 1 2の指標に満たない	3	4	2	2	学校図書館担当教員が企画した取組を鋭意実施してきたが、アンケートによる児童の読書に対する意識の高まりは十分でなかった。ただ、読書週間や朝読書で本を読んでいる姿を見ると、8割以上の児童は意欲的に読書に励んでいる様子がある。成果指標の達成に向けて、取組を見直していく必要がある。	前年度比4.5ポイント下がり、64.5%の結果であった。3割以上の否定的評価をした児童への対策として、まずは本に触れ合う時間を増やしていくことに努めていく。その際は、紙の本だけでなく、タブレット端末を活用した電子図書を意図的に活用し、いつでも・どこでも読める環境作りを全校で行う。また、児童一人ひとりに読書に関する、達成できるような目標を設定させるなど、少しずつ意識の高揚も併せて行う。
			②全教員が校内研究で確立した志一式「つなげタイム」を活用し、ITO（習得・考え・表現）を繰り返す授業実践 ②学びのエリア研修会を活用した、「つなげタイム」等の実践共有	4 全学級での実施 3 全学級9割以上の学級で実施 2 全学級8割以上の学級で実施 1 2の指標に満たない	4 全国学力テスト「思考力等」国語・算数共に 全国平均値より上 3 全国学力テスト「思考力等」国語・算数どちらか 全国平均値より上 2 全国学力テスト「思考力等」国語・算数どちらか 全国平均値以下 1 全国学力テスト「思考力等」国語・算数共に 全国平均値以下	3	4	4	4	全国学力・学習状況調査の結果は、全国平均値よりも、国語は9ポイント、算数は5ポイント上であった。また、思考・判断・表現に関する正答率は、国語・算数共に全問題で全国平均値を上回ることができた。ただし、算数においては、「直径22cmのボールがぴったり入る、立方体の箱の体積を求める式を書く」問題など、学習したことを身近な事象にあてはめて考える活用型の問題への正答率が低く、無回答率が高かった。	生活科・総合的な学習の時間などで、学習した内容や考え方を日常的な生活に生かす指導の充実が必要である。これまで本校で培ってきた「志一式つなげタイム」等の手法との関連を図りながら、全校体制で児童の活用力を高める。 また、算数で学んだことを日常生活に生かす活動を増やしていく。
連携・協働の充実	○家庭・地域・近隣学校・関係機関と連携した取組の充実 「地域とともにある学校」「学校を核とした地域コミュニティづくりの推進」	①コミュニティ・スクール推進に向けた全教員の意識高揚及び行動連携 ②郷土を愛し、地域に貢献する人の育成	①iCSへの教員参加 ①iCS便り等を通した内容の周知及び行動連携	4 ics報告書作成、教員周知 ※実施後1週間以内 3 ics報告書作成、教員周知 ※実施後2週間以内 2 ics報告書作成、教員周知 ※実施後3週間以内 1 2の指標にみたない	4 11月教職員アンケート「ics委員会熟議や活動の理解」肯定的評価8割以上 3 11月教職員アンケート「ics委員会熟議や活動の理解」肯定的評価6割以上8割未満 2 11月教職員アンケート「ics委員会熟議や活動の理解」肯定的評価5割以上6割未満 1 2の指標に満たない	4	4	3	3	iCSの推進に向け、主幹教諭や研究主任、養護教諭を参加させることができた。iCS便りも、iCS実施後すぐに教員に示したり、職員夕会で熟議した結果を周知したりするなどし、教員の意識も高めることができたと考えたが、アンケート結果は予想以上に伸びなかった。	iCS便りを配布した際は、その内容を口頭でも伝えたり、指導・助言等に活用したりするなど、工夫を凝らしていく。また、iCS便りで熟議した内容などを毎週の主幹会議等で分析し、学校の取組を即改善・即実行する意識で、日々の改善を図っていく。
			②生活科・総合的な学習の時間等の授業における、学校支援地域本部（学校おうえんだん）等との連携・協働	4 各学級　連携・協働回数 年間のべ6回以上割合 8割以上 3 各学級　連携・協働回数 年間のべ6回以上割合 6割以上 8割未満 2 各学級　連携・協働回数 年間のべ6回以上割合 5割以上 6割未満 1 2の指標に満たない	4 11月児童アンケート「地域や外部と連携した授業」肯定的評価9割以上 3 11月児童アンケート「地域や外部と連携した授業」肯定的評価8割以上9割未満 2 11月児童アンケート「地域や外部と連携した授業」肯定的評価7割以上8割未満 1 2の指標に満たない	3	4	4	4	第2回のiCSでiCS委員と教職員が、本校の地域と連携した教育活動を具体的にどのように進めるかを熟議する時間を設定した。これにより、iCS委員との関係が深まり、地域や外部機関との連携への協力依頼を各教員が直接行うようになった。また、教員からも、今回の熟議が多くの連携にきっかけとなったと言う声が度々聞かれるなど、地域の方々との連携に向けた意識も高めることができた。	今後は、教育課程内の取組の中で、iCS委員が児童と直接交流する場面を一層増やし、地域と共にある学校づくりを推進していく。
気付き　考え　実践する教職員	○「気付き」「考え」「実践する」学校・教職員をめざした、教職員の働き方改革の推進	①1か月あたりの時間外勤務45時間以内の実現（1日あたり時間外勤務2時間15分が目安） ②学校業務の質の向上及び精選、業務の平準化	①出勤・退勤時間の管理 ①水曜日18:00までの退勤徹底 ①教職員の月間時間外勤務目標値・取組の設定及び、進捗管理	4 9割以上の教職員による取組の徹底 3 8割以上の教職員による取組の徹底 2 7割以上の教職員による取組の徹底 1 2の指標に満たない	4 時間外勤務45時間以上 人数割合 6月、11月と比して、6割減少 3 時間外勤務45時間以上 人数割合 6月、11月と比して、5割減少 2 時間外勤務45時間以上 人数割合 6月、11月と比して、4割減少 1 2の指標に満たない	3	3	3	2	教職員の時間外勤務に対する意識が確実に高まり、定時退勤日の水曜日はほとんどの教員が18時前後に帰宅することができている。目標としていた「時間外勤務45時間以上 人数割合　6月、11月と比して、5割減少」には満たなかったが、昨年度時間外勤務が多かった2年次教員や本校1年目の教員は今年度毎月の時間外勤務が確実に減少している。	時間外勤務が常時多い教員2名に対しては、個別に仕事の進捗状況を確認したり、業務の割り振りを見直したりすることを今後一層強化する。また、働き方改革に資する研修等を企画し、働き方に関する意識やその手法について学ばせるなどし、改善を図っていく。
			②働き方改革の視点を取り入れた取組への改善 ②副担任制の質的向上（事務作業、児童対応等の分担）	4 全教職員による取組の徹底 3 全教職員9割以上による取組の徹底 2 全教職員8割以上による取組の徹底 1 2の指標に満たない	4 11月教職員アンケート項目「学校業務全体の改善」肯定的評価8割以上 3 11月教職員アンケート項目「学校業務全体の改善」肯定的評価6割以上8割未満 3 11月教職員アンケート項目「学校業務全体の改善」肯定的評価5割以上6割未満 1 2の指標に満たない	3	3	3	3	今年度は昨年度見直した校務分掌組織をもとに、組織的に業務を進めてきた。主幹教諭は昨年度と比べ、学校全体の状況を把握し、対応に努める意識は高まったが、業務の質を高める助言や、進捗管理には課題があり、内容が不十分な提案や期日ぎりぎりの起案が多かった。	来年度は主幹教諭が進捗管理や指導・助言を確実に行い、業務の質の向上を図ることに力を入れる。また、学年業務は、副担任制を徹底できるよう、年度当初に副担任制の在り方に係る文書を提示し、共通理解を図る。さらに、各学校行事や取組に働き方改革の視点を入れた内容で起案させるなど、教職員のアイデアを生かした体制づくりを進める。
豊かな関わり・規範意識の醸成	○自尊感情・自己肯定感の高揚及び、社会規範の育成 ○基本的生活習慣の定着及び、相手を尊重する気持ちの醸成	①児童が主体的に人と関わり、より良い人間関係を構築できる力、人のために役立つ生きる「人間力」の向上 ②誰もが安心して学ぶことができる学校生活の実現	①縦割りの清掃・遊び等を通した異学年交流の充実 ①いじめ防止に係る授業実践及び校内研修の実施	4 全教職員による 取組の徹底 3 全教職員9割以上による 取組の徹底 2 全教職員8割以上による 取組の徹底 1 2の指標に満たない	4 11月児童アンケート項目「友達と仲良くし、協力して生活」肯定的評価9割 3 11月児童アンケート項目「友達と仲良くし、協力して生活」肯定的評価8割以上9割未満 3 11月児童アンケート項目「友達と仲良くし、協力して生活」肯定的評価7割以上8割未満 1 2の指標に満たない	3	3	3	3	縦割りのなかよし遊びや学級会の確実な実施、いじめ防止等に係る授業・研修を通して、教職員の指導の質が高まってきている。誰もが安全・安心に過ごせる居場所作りを意識した対応に努めることができていると考える。各取組を通して、児童は自らの考えを述べ、積極的に交流する様子が見られる。 否定的評価をした13.8%の児童の支援が必要である。	今後は、学校行事や学級活動等で、人のために役立つ活動を増やすなど、より良い人間関係作りを図る視点を入れた内容へと改善していく。否定的評価をした児童の支援体制を見直し、改善を図っていく。
			②QUテストによる学級集団の状態及び、ふれあいアンケートによる、児童の状況の把握を通した、学習環境の改善 ②校内委員会による不登校児童への組織対応の充実	4 全学級による改善の実施 3 全学級9割以上の実施 2 全学級8割以上の実施 1 2の指標に満たない	4 不登校児童0人 3 不登校児童が昨年度より減少 2 不登校児童が昨年度と同等 1 不登校児童が昨年度より増加	4	4	3	3	教職員は、本校が掲げる「あったか先生」に向けた6つの行動を意識し、教育活動を進めた。不登校児童の対応も担任以外の教員やSCと協力し、運動会や音楽会に休まず参加することができた。また、QUテストやふれあいアンケートによる結果を生かし、各教員はその児童に寄り添った対応をすることができた。	配慮を要する児童には、家庭やSC・SSW、外部機関等と連携し、その児童の個性を踏まえた対応をとることができた。 今後の更なる充実に向け、「やさしい子」を重点目標に掲げ、誰もが教室内で温かな関わりの中で、切磋琢磨できる学級の環境づくりを推進していく。

学校関係者評価	総括評価【ABC】	分析コメント
	A	各委員の方から以下のコメントをいただいた。 「アンケート等のデータで根拠を示しながら、今年度の学校の成果と課題を伝えていただき大変わかりやすかった。課題となった地域との連携については、今年度の取組を更に強化していってほしい。」 「今年度の課題を踏まえて、次年度の教育計画を立てている。「落ち着いた学校づくり」に向け、活動を充実させてほしい。」 「地域との連携では、6年生の社会で戦争を体験した方から話を聞くことなど、子どもたちが興味・関心をもてるような工夫していってほしい。そのための協力はぜひしていきたい。」 「子どもたちから外で挨拶を受けることがある。嬉しい限りである。地域の行事への参加や地域を活用した授業を実施してきたことが要因の一つと考える。」 「学校教育の充実と働き方改革を進めることの両輪に向けて、保護者として、PTAとして協力していきたい。」 学校としては、これらの意見を踏まえて、今回提示した教育課程を見直し・改善し、めざす学校像・児童像に向け創意工夫を更に重ねていく。